

## 「21世紀COEプログラム」（平成15年度採択）中間評価結果

機関名	東京大学	拠点番号	J05
申請分野	学際・複合・新領域		
拠点プログラム名称 (英訳名)	心とことば—進化認知科学的展開 Center for Evolutionary Cognitive Sciences at the University of Tokyo		
研究分野及びキーワード	＜研究分野：情報学＞(言語理論)(認知心理学)(進化人類学)(言語の生物学的基盤)(自然言語処理)		
専攻等名	大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、大学院総合文化研究科広域科学専攻、大学院総合文化研究科超域文化科学専攻、大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻、大学院理学系研究科生物科学専攻、大学院農学生命科学研究科獣医学専攻、情報基盤センター、総合研究博物館		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)	長谷川 寿一 教授	他 19名

### ◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成17年4月現在）を抜粋

<p>＜本拠点がカバーする学問分野について＞</p> <p>人間とは何かという人文科学の主題に対し、近年、自然科学からのアプローチが急速に新しい光を投げ掛けるようになってきた。本拠点では、人間性の核心をなす「心（認知）とことば（言語）」に焦点をあて、認知脳科学、言語科学、進化人類学、進化心理学、遺伝学、発達科学、情報科学の連携による学際融合研究を行う。「心とことば」の「機構」「機能」「発達」「進化」について総合的理解を深め、21世紀型の人間統合科学の構築を目指す。</p>
<p>＜本拠点の目的＞</p> <p>今日、人類が共通に抱える地球規模の諸問題（環境、民族対立等）に対処するためには、「進化的、生物的存在としてのヒト」という巨視的な人間理解が不可欠である。そのためには旧来の人文科学の枠を打ち破り、自然科学諸領域との連携を大胆に図りながら新しい統合人間科学が創成されねばならない。本拠点では、東京大学の将来構想の柱である「人文科学の批判的継承と新たな知の組み替え」の理念に沿い、学内の言語科学、認知情報科学、人間生物学の研究者が共同研究を推進することによって、国際的拠点たりうる進化的人間研究拠点の形成をめざす。とくに次世代を担う若手研究者が国際的、複眼的視野を養える教育プログラムを実施する。</p>
<p>＜計画：当初目的に対する進捗状況等＞</p> <p>当初、目的としてうたった要点は、主に1) 異分野間の研究連携、2) 学際、国際的教育展開、3) 研究成果の国際発信と交流の3点である。1) では、異分野研究者が共同研究を実施するCOEラボを立ち上げ、認知言語脳科学、比較内分泌心理学等、多様な融合研究をスタートさせた。2) に関しては、若手が自主的に企画・運営する国際ワークショップ、異分野交流研究発表会、その他多数のシンポジウムやセミナーなどを実施した。3) は、国際会議発表支援、海外研究者の招聘と交流、国際学会でのシンポジウム企画などを行った。今後も複数の関連国際学会を日本で開催することを予定している。</p>
<p>＜本拠点の特色＞</p> <p>本拠点は、認知科学（心理学）、言語科学、人間生物学を統合した国内唯一の研究拠点である。同等の研究センターとしてはマックスプランク進化人類学研究所（ライプツヒ市：研究者200名規模）がある程度であるが、本拠点は小規模である分、融合研究を行う機動性に勝る。また総合文化研究科・教養学部という地の利を生かした、研究成果の教育現場への還元、社会的発信にも大きな特徴がある。</p>
<p>＜本拠点のCOEとしての重要性・発展性＞</p> <p>人文社会科学と自然科学の架橋は21世紀の人間研究の重要課題であり、両者に通じる若手研究者の育成も緊急課題である。進化認知科学・進化心理学は、欧米でもその誕生が1980年代後半と若い学問であり、成長期にある学際・複合型の学問領域である。認知科学は他の人文科学に先がけて自然科学との連携をすでに積極的に推進しているが、本拠点は、わが国における言語科学を統合科学へと発展させる大きな契機を与えるだろう。</p>
<p>＜本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果＞</p> <p>1) 比較ゲノム解析により人間性の進化に重要であった遺伝的基盤の解明が期待できる。2) 脳科学、比較認知科学、行動生態学の手法を用い、言語の生物学的基盤を明らかにできる。3) 発達研究、臨末・障害事例研究を通じて、高次認知機能の成立と発生の機序を解明できる。4) 情報科学と認知・言語科学の融合により、心と言語のモデル化が可能になり、マン＝マシンインターフェースの改良に貢献できる。5) 集約的に多言語横断的研究を行うことによって、言語の普遍性と多様性の実態が、かつてない精度で明らかとされる。6) 個別領域にとらわれない巨視的、複眼的発想ができる研究者が養成できる。</p>
<p>＜本拠点における学術的・社会的意義等＞</p> <p>学術的意義としては、従来、人文社会科学と自然科学の個別領域の内部で行われてきた人間研究を文理横断型の統合科学として再編成できることを指摘できる。社会的意義としては、人間存在と人間精神の生物学的、進化的基盤を解明し、その成果を社会発信することによって、「人間とは何か」を現代的に再定義し、現代社会の諸問題の解決に向けた知的基盤を提供できる。人口問題（ヒトの繁殖戦略の問題）、地球環境問題（ヒトの環境適応の問題）、民族対立と戦争（ヒトの他者理解と攻撃性の問題）の解決のための直接的な基礎研究として貢献しうる。</p>

### ◇21世紀COEプログラム委員会における評価

<p>(総括評価)</p> <p>当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>
<p>(コメント)</p> <p>人材育成については、様々な研究歴や教育歴をもった若手研究者がCOE研究員として採用されており、各研究員の間には密な日常的交流が見受けられ、互いに新しい視点や方法論など多くの刺激を得ることによって、従来の研究関心が大きく展開した研究テーマの設定や絞り込みが行われている。また、恵まれた空間が確保されており、若手研究者の自律的な研究サイトの設定および実験実施を通じて研究者としての力をつけつつある点などは評価できる。</p> <p>研究活動については、本プログラムの目指す「心とことば」の複合的学際的研究の統合研究モデルが提示され、現在までに達成あるいは進行中の個別研究の位置づけと意義が説明されたことにより、本プログラムの進行状況を俯瞰的に理解し得た。中間段階として実現可能な範囲で研究は進行していると思われるが、今後、このモデルが若手・コア研究者間で実証研究の進展と同時並行して更に検討され精緻化されることが求められる。</p> <p>有機的連携については、異分野研究者の交流において、若手研究者および事業推進者の中核メンバー間の交流は活発である。また、これまで蓄積された研究の公開、講演会などの実績もベースに、進化認知科学研究センターや進化認知科学の専攻コースの設置が学内で構想準備されており、さらに進化認知科学国際学会の開催も決定しているなど、本プログラムの成果への期待は大きい。</p>